

集約的農業と農民の「移動性」

タンザニア南西部マテング族の事例から

●加藤正彦

はじめに

独立以降のアフリカ諸国では、急激な人口増加に対処すると同時に、経済発展をはかるための方策として、農業の集約化という課題が掲げられてきた。在来の農業が近代農業と接触し大きく変容する中で、アフリカ農業の特性として指摘されてきた「粗放性」も、かつてのままではいられなくなった。

この小論では、「ンゴロ」(ngoro)と呼ばれる集約性の高い在来農法を維持し、コーヒーを換金作物として栽培する農耕民マテング族を紹介するとともに、農民の土地利用動態を検討することによって、「移動性」を内包させたマテングの集約的農業について考察を加えてみたい。

1 ンゴロ農法

マテング族が主に居住する地域は、タンザニア南西部のルブマ州ムビンガ県である。地形は山がちであり、標高は900～1700mの範囲に及ぶ。年間の平均降水量は1200mm前後、年平均気温は約23度で冷涼な気候といえる。1929年にキリマンジャロ州より導入されたコーヒー栽培は、こうした自然

条件に恵まれて広く普及していった。90～94年のムビンガ県におけるコーヒーの生産高は、タンザニア全体の4分の1程度を占めるまでになっている。現在、多くの農民は化学肥料の投入や農薬散布をおこない、こまめに除草するなど熱心にコーヒーを栽培している。永年作物であるコーヒーの栽培が広まるにしたがって、人々の定住化傾向は強まりつつある。

彼らを定住化させている要因としては、コーヒーの栽培だけではなく、「ンゴロ」と呼ばれる在来農法もあげられるだろう。ンゴロという言葉は、もともとマテング語で「穴」を意味する。パイク(A. H. Pike)は1938年に、この農法をピット・システム(pit system)として紹介した。ンゴロの畑は、山の斜面地を開墾し、幅1mほどの畝を格子状に造成することによって成り立つ。平均的な広さの畑(約0.8ha)を見渡すと、格子の内部にできた穴(縦1.3m、横1m、深さ0.6mくらい)が約1500個も整然と配置されているのに驚かされる(写真)。

ンゴロの畑では、主食となるトウモロコシとインゲンマメが輪作栽培されることが多い。この耕起作業は、雨季の後半にさしかかる2～3月に始まる。まず男性が、ゲセラと呼ばれる鎌で、生い茂った雑草を刈り取り、1週間ほど放置してから草を格子状に並べて畝の骨格とする。その後には女



ンゴロ畑の全景。格子状の畝にはインゲンマメが植えられている。
(筆者撮影)

性が、鋤で格子内部の土を軽く掘り起こして格子状に並べた草の上に被せる。耕起の際には畝替えがなされ、以前の畝の部位が穴となり、逆に穴の部位が畝となる。そしてインゲンマメを播種し、土で覆う。6月にインゲンマメを収穫した後は、12月の雨季の開始直後にトウモロコシを耕起作業なしで播種し、翌年の7～8月に収穫する。普通、1人の既婚女性はトウモロコシ用とインゲンマメ用に2枚のンゴロ畑を持っている。それぞれの畑をA、Bとすると、1年目はAにインゲンマメ、Bにトウモロコシを植え、2年目はAにトウモロコシ、Bにインゲンマメを植える。利用できる土地に余裕があれば畑を休ませることもあるが、人口の密集した地域では、2枚の畑だけで食糧作物を作り続けなければならない。

ンゴロ耕作の労働集約性について触れておこう。ンゴロ畑と平地において時々見られる横畝の畑(畝の間隔は約1.5m、高さ約30cm)とで耕起に要する作業時間を比較すると、1ha当りンゴロでは平均122分、横畝では平均72分かかっている。すなわち、ンゴロは横畝の1.7倍の作業時間を費やしていることになる。また、ンゴロでは深さ60cmほどの大きな穴を掘らねばならず、覆土作業をしながら農民

は腕が疲れるとよくこぼしていた。病みあがりですべての女性が、ンゴロでの耕作を断念し横畝にしたという話も聞いた。ンゴロ耕作は作業時間だけではなく、体力も要求される労働なのである。

文献資料や伝承によると、19世紀の初頭に南方からンゴニ族が侵攻してきたとき、マテング族が現在の居住域である山岳地帯へと難を逃れて移住した。ンゴロ農法は、その時代に創出されたものだという。その背景には、傾斜がきつく、利用できる土地に限りがあり、加えて雨季の豪雨をしのいで耕作を続けなければならないという条件があった。マテング族の人々は、斜面地の畑に穴を掘ることによって土壌流出を防ぎ、畝に雑草を埋め込むことによって有機肥料を確保したのである。1950～55年にタンガニーカ北部州の研究センターがおこなったトウモロコシの栽培実験では、ンゴロ畑における収量は横畝の畑の約2倍を示した。労働集約性の高いンゴロ農法は、結果として土地の生産性を高めていると考えられる。

ここで今日のマテング農業経営におけるンゴロ農法の位置づけをしておこう。調査地の17世帯の篤農家を対象として、各世帯が耕作している畑の面積とその農法を調べた。それによると、全世帯の総耕作面積は66haで、そのうちコーヒー畑は11ha(17%)、食糧作物の畑は55ha(83%)であった。また、食糧作物の畑のうち、ンゴロ農法による畑は42ha(76%)、横畝の畑は6ha(11%)、残りの7ha(13%)は谷筋を開墾した畑や焼畑であった。食糧作物が、主としてンゴロ農法によって栽培されていることがわかる。

2 農民の「移動性」

本節では、農民の土地の入手のしかたと耕作歴を分析することによって、ンゴロ農法に代表され

る集約性の高いマテング農業が、農民の高い移動性を内包させていることを示してゆく。

マテング社会の伝統的な土地保有システムでは、小さな父系リネージ（例えば、存命中の一人の祖父を中心とした親族）が、山の斜面などを保有し、各世帯（主に核家族）はその一部を割り当てられて利用していたと考えられる。婚出した女性は夫方に住み、夫の父から食糧作物の畑を与えられて耕作していた。こうした伝統的な土地保有システムが、今日どのように変容しているかをみてゆこう。

私は、畑の耕作者が誰から、いかなる形でその畑を手に入れたかを調査した。食糧作物用の畑のうち、耕作者自身が開墾した畑を除いた167枚の畑を対象にして整理したものが表である。土地の供与者については、リネージ内の者、夫の姻族、その他の知人の三つのカテゴリーに分けた。表から耕作者は86枚の畑（約51%）をリネージ外の者から供与されていることがわかる。つまり、半分以上の畑は、伝統的な土地保有システムから外れた方法によって入手されているのである。この理由について考えてゆきたい。

まず、人口の増大と貨幣経済の浸透が一因としてあげられよう。コーヒー栽培の盛んな地域では、1平方キロ当たりの人口密度が100人を超える村も多い。こうした地域では、土地不足と土地の疲弊が深刻な問題となっており、また貨幣経済の影響も強い。実質的な土地の私的所有権が認められつつある。そこでは、リネージが土地を「保有」し、個人はそれを「利用」というシステム自体がゆらぎ始めている。

人間関係の軋轢から移住がしばしば起こることも理由としてあげられる。表でリネージ外の者から購入した畑は計38枚あるが、この中で少なくとも16枚は、供与者がリネージ内でのいざこざから移住を決め、畑を売却したものである。

食糧作物の畑の入手方法

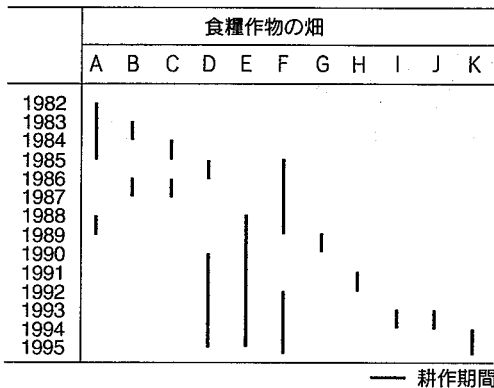
	土地の供与者		
	リネージ内の者	リネージ外の者	
		姻族	知人
相続または贈与	70	5	2
購入	6	9	29
無償貸与	5	15	9
有償貸与	0	0	17
合計枚数	81	29	57

一つ例を出そう。ある年輩の男性は息子夫婦と一緒に暮らしていたが、息子夫婦の幼い子供が急死したのをきっかけに、息子から邪術の嫌疑をかけられ、父と息子は反目しあうようになった。やがて父は移住を決意し、1990年に家屋とコーヒー畑、そして食糧作物の畑を計35万タンザニア・シリング（当時25万円）で知人に売却しようとしたところ、息子は売るなら自分に売ってくれと要求した。この場合は村の裁判ざたにまでなったが、結局父の主張が認められ、家屋敷と畑は知人に売却された。

私は人口の多い村から少ない村へ移住した人々に移住の理由を尋ねてみたが、当初は以前の居住地では土地が不足したから、あるいは土地が疲弊したからと語っていた人々が、詳しく話を聞いているうちに、親族と折り合いがつかなくなったことを理由として付け加えるということがよくあった。マテング農民は永年作物であるコーヒーを熱心に栽培し、ンゴロ農法によって常畑耕作への可能性を高めているとはいえ、親族内での人間関係のこじれなどによって、彼らの定住化傾向は、ある程度抑えられているように思われる。

次に、農民の耕作歴をたどることによって浮かび上がってくる、農民の「移動性」について触れておこう。ここでは、一人の中年女性の例を提示

ある農民の耕作歴（1982～95年）



（出所）筆者作成。

しておきたい。聞き取り調査によれば、彼女は1982～95年の14年間に場所を異にする11枚の畑(A～K)を耕作した(図)。これらの畑は、家を中心として半径30^{キロ}以内という広い範囲に点在している。11枚の畑のうち、2枚は夫の父から与えられたものであり、1枚は父の義父から購入、2枚は姻族と友人からの有償貸与、6枚は実父と妹、および姻族や友人からの無償貸与で入手している。

彼女のような耕地選択のパターンは、マテンゴ農民のあいだでは珍しいことではない。こうした耕地選択にみられる「移動性」はなぜ起こるのだろうか。一つは農民がより肥沃な土地を求めて移動するためであり、これがもっとも基本的な理由であるといえるだろう。しかし、彼女の例で言えば、家から25^{キロ}も離れた両親の村に土地を確保し、連作によってやせた畑に化学肥料を投入してまで耕作している畑もある。彼女は朝暗いうちから親しい者と畑に出て、ひがな一日喋りながら鋤をふるい、夜は焚き火を囲んで遅くまで話をしてきた。つまり、身内との情報交換や歓談を求めて、遠隔地の畑を選択しているのだと思われる。

さらに、故和崎洋一氏がスワヒリ文化の特質と指摘した「テンベア」(スワヒリ語で、放浪すること)

への指向性も、このような耕地選択パターンに影響を与えているように思われる。彼女は、ある年に友人とンゴニ族の住む村へ出かけて耕作をし、彼らの働きぶりを見てきたという。好奇心に支えられたテンベア行動は、楽しい会話の種にもなる。また、「怠け者」という言葉は、人々の日常会話の中できわめて頻繁に使われているが、その意味するところは、「あちこち出かけてばかりいて、家で畑仕事をしながらいない人」という場合が多い。人間は皆テンベアへの欲求を抱えているが、テンベアばかりしては仕事が進まない。それを意識して、自他への戒めを怠らないのである。彼らが点々と耕地を移すのも、見方によっては、仕事という名目で“公認の”テンベアをしているといえるかもしれない。

おわりに

本論の前半では、マテンゴ農業におけるンゴロ農法のしくみを中心に論じた。この在来農法の特徴は、比較的高い労働集約性と、土壤保全や緑肥効果によって土地の生産性を高めているところにある。マテンゴ農民は比較集約度の高い農業を営んでいるといえるだろう。しかし、後半で論じたように、ひとたび農民の社会関係や行動に目をやれば、そうした集約度の高い農業が、人の移住や耕地を分散化させるといった、人間の移動性と共存しつつ展開していることがわかる。労働、あるいは土地への集約性を高めようとするときには、農民の高い定着性が前提であるかのような議論があるが、今日のマテンゴ農業は、その基層部に移住や移動を繰り返しながら、集約度を高めてきたと考えられる。

(かとう・まさひこ/京都大学大学院)